

---

# 恋愛バトル

蘭和三

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛バトル

### 【Nコード】

N9941F

### 【作者名】

蘭和三

### 【あらすじ】

櫻田琥珀と二人の幼馴染、それに生徒会の人々さらにそのまわりの人たちがおこす琥珀をめぐった恋愛バトル。さらに、友達との友情を描いた。ドタバタラブコメ。ぜひみてください。未完です。当分の間更新しません。理由は、あたくしやる予定の小説を書くからです。すみません。ですから、当分の間は更新しません

## プロローグ

「さてと、学校にでも行くか」

そう言っただけはドアを開けた。

「おはよう。琥珀くん」

「おはよう。琥珀」

「ああ、おはよう」

そういつて、俺たちはマンションを出た。

「今日もいい天気だね。琥珀くん」

俺の名前は、さくらだこはく櫻田琥珀。

木の葉学園に通っている普通の高校生だ

そんな、俺でも二つの自慢がある

一つは剣道。

剣道は、小学校から中学3年までやっていた。全国大会で、優勝  
したことが

ある。だが、あることがきっかけで全くやらなくなった

もう一つは、喧嘩だ。

昔から、力が強く負けなしかった。

俺の事を『琥珀くん』と呼んでくれているのは、綾乃。

本名、一ノ瀬綾乃。いちのせあやの

スポーツ万能、頭もよく学年でいつも、トップを必ずキープして  
いる。

それでいて、容姿端麗で人望が厚いため生徒会長をやっている。

でも、結構なドジっ子である。まあ、それがいいのかフアンクラブまである。

そして、俺の事を呼び捨てしているのは玲奈。

本名、一ノ瀬玲奈。いちのせれいな

スポーツ万能で姉の綾乃よりは劣るが頭がいい

玲奈も容姿がいたためこちらにも、フアンクラブがある。

あと、風紀委員長でもある。

姉とは違って、根がしっかりしているためドジとかはおかさない。

「・・・く・・・はく・・・琥珀！」

「うお！何度よ急に」

「何ってこっちのセリフよ。ボーとしちゃってなにかあったの？」

「い、いやなんでもない」

「そう。ま、あんたのことだからどうしようもないことなんですよ」

「どうしようも、ないことってなんなんだよ！」

「さあね、自分に聞いてみれば？」

「このアマ」

「はいはい。そこまで、ですよ。琥珀くん玲奈ちゃん。」

「綾乃。わかったよ、やめりゃいいんでしょ。」

「そうですよ。琥珀くんえらいですね。玲奈ちゃんも、もういいですね」

「はい」

「綾乃。お願いだからこども扱いするのをやめてくれ！」

「わかりました。琥珀くん。」

「たく、ほんとにわかったのかなあ」

そんなこんなしているうちに、俺たちの高校、木の葉学園についた。

さて、今年一年。どんな年になるのか、期待と不安を胸に学園内

に入っ  
た。

## ブログ（後書き）

前書いた後書きは無愛想で申し訳ありませんでした。  
はじめまして、蘭和三です。

正直言つて更新の速さはかなり遅いです。  
できるだけ、早く更新させていただきますので、許してください  
誤字脱字があったら、報告してください。  
感想お待ちしております。

これから、よろしくお願いします

## 第一話

「よう、琥珀」

「なんだ、亮哉か」

「なんだとは酷いな」

「わりーわりー」

「お前はいいよな、二人の幼馴染がいてその二人とも学園のアイドルだからな」

「何がいいんだよ。ただ五月蠅いだけだ」

「そう言えるお前がうらやましいよ」

「お前の方がもてるんだからうらやましがることないだろ」

こいつの名前は、木場亮哉。きば しょうざ

サッカー部のエースでサッカー部の得点はこいつがほとんどだ。

そのため、結構もてる。さらに、プロからのスカウトを何度も受けているが

すべて、断っている。本人いわく、サッカーを職業にしたくないそう  
うだ。

「うらやましいに決まってるんだよ」

「わかったよ」

「あ、そうそう転校生がくるんだってよ」

「へーそうなんだ。」

いったい、だれなんだろうと考えていた

「おい席つけ。ここで、転校生を紹介する。おい、入ってきてい  
いぞ」

「どんな奴なんだろうな」

ドアが開いた。

「し、雫!？」

「あ、おにいちゃん」

「おにいちゃん!？」

クラスみんなは声をはもって言った

「ま、まあ気を取りなおして紹介する。櫻田雫くん、みんなよろしく」

「席は、琥珀の隣が開いているなじゃあそこ座れ」

「わかりました」

「よろしくね。おにいちゃん」

まじかよ。まさか、雫が来るとはな

さくらだしずく  
櫻田雫。

俺の義理の妹である。

実は今俺、一人暮らしだ。

雫は俺の両親とアメリカに行っていたはず

だから、会うのも四年ぶりぐらいになる。

容姿も良いし成績も良い、スポーツもそこそこできる。そんなやつである。

あとは、ものすごいブラコンだ。俺と一緒にいるとべったりしてきて離して

くれない。何度、無理やり離そうとしたことか……

「さ、授業始めるぞ」

~~~~~昼休み~~~~~

「さてと、飯でも食いに行くか」

「おい、待てよ。雫ちゃんとの関係を話せ」

「関係って言われてもな。わかったよ、話すよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「なるほど、要はお前の義理の妹で実際お前自身も驚いているということだな」

「そういうことだ。」

「琥珀くんと一緒に昼食べよう」

「いまいくよ」

俺は席を立ち綾乃たちがいるところにいこうとしたが

「なにやってんだよ。雫」

「おにいちゃんは私とお昼食べるの」

雫は俺の脚を離してくれない

「お前な」

「ダメ？おにいちゃん」

「わ、わかったよ」

「おい、綾乃。雫も連れて行っていいか？」

「いいよ」

「よかったな。雫」

「よくないよ。私はお兄ちゃんと一緒に二人だけで食べるの」

「わかったよ。今日はお前だけと食べる」

「おい、綾乃悪い。明日一緒に食べるから今日はあきらめてくれ」

「え。しかたないな。じゃあ、明日必ずね」

「ほんとに悪いな」

そういつて、二人はどこかに行った

「さてと、いくか雫」

「うん！おにいちゃん」

俺と雫は食堂に行った。

## 第一話（後書き）

第一話どうでしたか？

うまくできてないと思うのですみません。  
会話文が多いのは他のが苦手だからです。  
いずれ、それを克服したいと思います。  
では、次回よろしく願います。

## 第二話

俺と雫は今、食堂に来て学食を食べている

「ところで、雫いつ引越してきたんだ？」

「ううん。まだだよ明日引越すの」

「そうなんだ。場所はどこだよお前さえよければ俺手伝ってやるよ」

「手伝うも何もおにいちゃんのところだよ。聞いてない？」

「俺の家！？誰からも聞いてねーよ！」

「おつかしいなー本当にお父さんから何も聞いてないの？」

あのかそ親父ーなんで、雫が俺と同じ家なんだよ。

「聞いてないっつーの」

「なら、お願い一緒に住まして」

雫は、泣きながら言った

「わかったよ一緒に住んでいいよ」

「やったー」

雫は喜んで言った

「荷物はおにいちゃんの家宛に送つといたからね。明日届くよ」

「え！はあーなんだかなー」

「よろしくねおにいちゃん。私、教室に先行ってるから」

「んで、何の用だ綾乃、玲奈？そこにいるんだろ」

「ギク！ば、ばれちゃったかー」

「ギクって言ったやつはじめてみたよ」

「ところで琥珀、あのこだれ」

そう、玲奈は怒ったかのような口調で言った

「あのこつて、ああ雫のことか。俺の妹だよ。ま、血はつながってないけどな」

「あんたに妹なんていたんだ。ふん」

「なんだ。いなかったほうがよかったみたいな口調は」

「そんなことないわよ」

「琥珀くんあのこ、琥珀くんの家にすむの？」

「そうだけど、どうかしたか？」

「ふんそうなんだ。ねえ、琥珀くん今日の放課後予定ある？」

「いや、特にないけど？」

「ならさ、今日話したいことあるんだけどいい？」

綾乃は、険しい顔で言った

「ああ、いいよ」

あんなに険しい顔して何の話なんだろう。そう思っているとき  
チャイムが鳴った

「じゃよろしくね」

・・・・・・・・放課後・・・・・・・・

「琥珀くん来たよ」

「おう、今行く」

「えゝおにいちちゃん私と一緒に帰ろうよ」

「悪いな雫。今日は綾乃たちと帰るんだ」

「うゝ。わかったから、明日一緒に遊んでよ」

「わかったよ」

「絶対だよおにいちゃん。じゃあまた明日ね」

雫は帰って行った

「綾乃少し待たせたな。あれ、玲奈は？」

「玲奈ちゃんは、校門で待っているよ」

「なら、行くか」

「うん」

・・・校門・・・

「待たせたな、玲奈」

「お姉ちゃんも琥珀も遅いわよ」

「悪いな。玲奈」

「悪かったな玲奈ちゃん。行こっか」

「そうね」

「んで綾乃、話ってなんだ？」

「えっとね琥珀くん。私つけられているんだ」

「つけられているってストーカーか？」

「おそらくそうだと思う」

「お姉ちゃん！なんで、そんな大切なこと黙ってたの！」

「だって、まだつけられているっていう確証がなかったから黙ってたの」

「いつごろからか？」

「二週間ぐらい前だと思う」

二週間ぐらい前っていうことは始業式の時ぐらいからか

「なるほどな。俺は何したらいい？」

「明後日あたりストーカーをおびき寄せて捕まえるつもりなの」

「ということは、その日俺は、ストーカーを捕まえればいいんだな」

「そういうこと」

「琥珀くん。やってくれる？」

「ああ、いいよ」

「作戦は明後日教えるわ」

「男の子もう一人呼んでくれるかな？」

「いいよ」

「じゃ当日な」

「うん。またね」

俺たちは別れて自分たちの家に戻った

俺は、家のドアを開けた

「あ、おかえりおにいちゃん」

「うお、雫なんでここに!？」

「なんでって、今日からおにいちゃんの家に住むんだよ」

「まじかよ。っておい、焦げ臭いぞ」

「あ!あゝあ、やつちゃった」

「おい、どうしたんだよ」

俺は、そう言ったあと家の中に入った

「おにいちゃんを喜ばそうと思って料理つくろうと思ったけど失敗しちゃった」

こいつ、料理全くダメなのにがんばって・・・

「気持ちだけで十分だ、ありがとな雫。」

「うん！」

「さて俺が作りなおすからそこでまってる」

「わかった。おにいちゃん」

さてと、料理をつくるか

・・・・・・・・・・一時間後・・・・・・・・

「よしできたぞ。おい、雫手伝ってくれ」

「はい。うわ、すごいねおにいちゃん」

「いつも、これぐらいつくってるさ。だって、もうそろそろ

あいつらが来るからな」

「あいつらって？」

「ま、わかるさ。」

インターホンがなった

「噂をすれば来たぞ」

「琥珀。来たわよ」

「琥珀くん来たよ」

「綾乃と玲奈あがってきていいぞ」

「はい」

「あいつらって、あの人たち？」

「ああ、そうだよ。琥珀くんと、呼んでいるのは綾乃琥珀と呼んでいるのは玲奈だ。あいつらは、飯を家で食うんだ」

「（おにいちゃんと二人きりだと思ったんだけどな。はあ）」

「どうした。雫」

「ううん。なんでもないよ」

「そうか」

「あれ。そのこがあんたの妹？」

「ああ、そうだよ。雫だ」  
「雫ちゃんね。よろしく、雫ちゃん」  
「よろしくね玲奈さん。綾乃さん」  
「さて、食べるとするか。いただきます」  
「「いただきます」」

・・・食事後・・・

「琥珀くん。また、料理の腕上がったね」  
「はいはい。お前から自分で飯作れよ」  
「琥珀。別にいいじゃない減るものじゃないし」  
「わかったよ。」

こいつらは親が遅く帰ってくることが多いからよく俺んちに来て  
飯を食べに来る

「ねえ、琥珀くんゲームやろう」  
「ああ、いいよ。雫もいいか？」  
「うん！」  
「雫、行こうぜ」  
「はい。おにいちゃん」

・・・二時間後・・・

「あ、もうこんな時間だ。琥珀くん明後日よろしくね」  
「わかったよ。」  
「さて、寝るか」

俺は、寢床に就いた

## 第二話（後書き）

すみません。どうしても会話文が多くなってしまします。第三話からは会話文をもう少し少なくしてもらいます。

えっと、他に話すことがなくてすみません。では、次回よろしく願います

### 第三話

「うゝん」

俺は、欠伸をしながらいった

「うん？なぜかしらんが、布団が盛り上がってるぞ」

そう言った俺は、恐る恐る布団をとった

「うお！し、雫なんでお前がここにいるんだよ！！」

「あ、おにいちゃんおはよう」

「おはようじゃねえよ！！なんで、お前が俺の布団の中にいるんだよ！！」

そつだよ。雫が何でいるのか聞きたいね

「昨日寝ぼけて、おにいちゃんの部屋の中に入って一緒に寝ちゃった」

寝ぼけて一緒に寝ちゃったって、オイオイこいつには恥じらいはないのか

「ところで、雫。早くどいてくれないかそこにいと起き上がれないのだが」

「えゝおにいちゃん。もつすこし、このまんまでいさせてよゝ」

「断固拒否する」

「むゝゝ」

「むゝゝ。じゃない！」

さてと、着替えるか

「てか、何でもまだいるんだよ!」

「暇だから?」

「さっさと出てけ」

俺は、雫を部屋から追い出し着替えてリビングに向かった  
そして、飯を食べソファに座った

「遊ぶって何をするんだ。雫?」

「えっとね、おにいちゃん。デートしよ!」

「おいおい、デートってお前な」

「だめ?おにいちゃん」

雫は泣きそうな目でこっちを見た。

こんな目で見られると断るにも断れないよな

「しゃくない。いいよ。」

「ホント?おにいちゃん」

「ああ、ほんとだよ」

「やった。じゃあ、できたばかりの水族館にいこうよ」

水族館とは最近できたばかりの西京水族館だ。中は世界最大級の水族館だ。

中には遊園地や動物園なのも併用しているためかなりの人気だ  
遊園地は世界一のジェットコースターや幽霊屋敷（この幽霊屋敷は、

本物もでるそうだ）

動物園と水族館は珍獣や絶滅危惧種も扱っているところだ

「いいよ。じゃあ、さっさと支度しろ」  
「はい」

・・・・・・・・・・・・・・・・1時間後・・・・・・・・

「支度すんだよ」  
「そうか。なら行くぞ」

俺たちは家を出た。  
そして、俺たちは水族館に着いた。

「大きいね。おにいちゃん」  
「ああ、そうだな」

ほんとにでかい。沖縄にある美。水族館なんか比べ物にならないくらいでかい。

「さて、中に入るか」  
「そうだね。おにいちゃん」

俺達は、水族館の中に入っていった。

「うわ、すごいよ！ねえねえ、おにいちゃんあれなに！？」

おいおい、そんなに騒ぐなよ雫。

「えっと、それはイタセンパラというらしいな」  
「じゃあこれは？」

「それは、リュウキュウアユというのらしいな。てか雫、説明くら

い見れば

いいじゃないか」

「そうだったね。おにいちゃん。」

「さて、次行くか雲」

「うん！おにいちゃん」

俺たちはそのあといろんな、魚を見てきて遊園地に来た

「おにいちゃん、あれ乗ろうよ」

「お、おい！あれは、無理だ！絶対無理だ！！」

そういつて、雲が指したは、『気絶者続出！！超危険！ジェット  
×2

コースター！』というジェットコースターだ

「え、なんで。別にいいじゃん、おにいちゃん」

「無理なもんは無理だ！」

「ねえ、だめ？おにいちゃん？」

上目に泣き目はないだろ

「わ、わかったよ。」

「ホント！おにいちゃん！？」

「ああ、ほんとだよ。さっさと行くぞ雲」

「うん！」

そして、俺たちはジェットコースターに乗ったが二人とも降りた  
後に

トイレで吐いたのは、言うまでもないだろ……

そのあと、お化け屋敷やほかのやつにものって時間は、午後4時

55分

「ねえ、おにいちちゃん最後にあれ乗ろうよ」

雫が指した場所は、観覧車

この観覧車には、不思議な言い伝えがあつて午後5時に「ゴーン」という

鐘が鳴った時頂上にいる男女は永遠に結ばれるという言い伝えがある。

「ああ、そうだな。最後にあれを乗るか」

俺たちは、並んだ。そして、俺たちの番が来てゴンドラに乗りこんだ。

「ねえ、おにいちちゃん。ひとつ聞いていい？」

「なんだよ、雫？」

「今、おにいちちゃんは好きな人いるの？」

「いや、いないけど」

「そっか、ならよかった」

「なんだよそれ。なら雫は？」

「私？私はずっと前からいるよ」

雫は少し悲しそうな目で言った

「ふゝん。そうなんだ。そいつは幸せだな！」

「そのあいては、おにいちちゃんなんだけどな……………」

「ん？雫なんかいったか？」

「うつん。何にも言ってないよ」

そのとき、「ゴーン」という鐘が鳴った

「おにいちゃん、おにいちゃん！！鐘が鳴ったよ！」  
「ああ、そうだな」

そして、琥珀たちがいる場所は頂上を少し過ぎたところにいた

「（あゝあ残念だったな。もう少し遅く乗ってれば頂上だったのに・・・）」

そんなこんなあつて琥珀たちは観覧車を降りた。

「ねえ、おにいちゃん」

「ん？なんだ零」

「また来ようねー！！」

「ああ、そうだな」

そして、ふたりは家に帰って、家の中に入った

### 第三話（後書き）

えゝ皆様。更新おくれですみません！

すみません！すみません！本当にすみません！

言い訳を2つ言います

まず1つ。ネタが浮かばなかったこと

2つめ。いろいろなことがおおくてできなかったことです。

次はできるだけ早く更新しますので長い目で見守ってください。  
よろしく願います

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9941f/>

---

恋愛バトル

2010年10月12日04時47分発行